

境界線なき世界へその内と外を行き来して

福岡県立修猷館高等学校二年
宇野由里子

「心の輪を広げる」

私はこの表現の意味を考えた。「輪」と表現する以上、そこには「境界線」が存在するのだろう。私たちは無意識のうちに「普通の人」と「障がい者」の間に線を引いてはいないだろうか。つい口にしてしまう「普通」という言葉。そもそも「普通」という画一的な線引きなどできないはずだ。しかし、私自身がいつの間にかこの境界線を行き来することに苦しんでいたと気づくことになる。

「おーうい、ゆうーりいたん！」

誰かに声をかけられた。どこか懐かしくて、しかしただどたどしい。顔を上げると、その笑みは私の視野いっぱいに至近距離で広がった。彼女の名前はめぐちゃん(仮名)。小学校の頃と変わらず私に元気に手を振ってくれた。びつくりして目を見開く私をおいて、彼女は小柄なお母さんに手を引かれ通り過ぎていった。診察室に向かう後ろ姿は、以

「めぐちゃん！ やっほー！ げんき？」

短い会話だが、心を開いて包み込んでくれるようで、とても嬉しかった。

そんな低学年のころ、実は私は紫斑病という病を患い、福岡こども病院に入退院を繰り返していた。突然の腹痛と同時に下肢に現れる紫斑。診断が下れば即入院で、まずは数日の絶食から始まる治療。まだ幼くか細い腕に、ミシン針のように太い点滴針を刺し、ぐるぐる巻きにテーピングされた。ベッドから動けず、一週間後にやっと車いすの時もあった。目の前に伸びる病棟の廊下が、どこまでも長く続いているように見えた。

とはいえ、私の入院期間は一〜二週間程度で短い方だった。周囲には、まさに難病と闘う子どもたちがいた。たくさん人の管で機械に繋がれた子、補助車を使ってゆつくりと歩く子、ベッドから一步も出られない子…。出身地が遠い人も多かった。長期入院の子とも知り合いになり、励まし合ったものだ。

たくさん我慢してやっと迎える退院の日、まだ入院が続く子たちに申し訳ない気持ちと、学校にやっと行けるという期待、でも学校には何となく行きたくないという気持ちが複雑に混じり合っていた。退院直後の私はいつも痩せ細り、体力は落ち、運動が得意な友達が輝いてみえた。久しぶりの再会に笑顔で囲んでくれる元気な友達たちとの間に、

前と変わらず痩せている。久々の再会だというのに笑顔を返す間もなかった。あつという間の出来事だった。

高二になった私だが、「こども病院」で年に一度の検診の日に、まさかめぐちゃんに会えるとは思いつかなかった。

同じ小学校の同級生だっためぐちゃんには知的障害がある。クラスから日替わりで三人ずつ特別支援学級に足を運ぶ「昼食交流」の場で、初めて彼女に出会った。その後運動会や合唱コンクールでは、私がめぐちゃんの介助担当になった。その後も偶然掃除場が同じになることが多く、彼女は私の名前を他の友達よりも早くに覚えてくれたようだった。

私が友達関係で落ち込むようなときも、テストであまり良くない点数を取ったときも、めぐちゃんはいつも変わらない満面の笑顔で、しかし何度か聞き直さないと聞こえないようなやさしい声で、私に話しかけてくれた。

「やっほおー、ゆうーりいたん！」

「壁」のようなものを感じていた。不安で薄暗い毎日の中に一筋の光を見出し、ひたむきに努力して一日を生きる仲間たちと励まし合い、つい昨日まで一緒に闘っていたつもりなのにとつて、無理もないことだった。そんな私に、めぐちゃんのあの大らかな笑顔が安らぎを運んでくれたのだった。

翻つて、現在の私はどうだろうか。水泳を続け、病気を克服し、スポーツでも活躍できる体を手に入れた方がいいが、当時の切実な思いを忘れてはいないだろうか。置かれた状況に感謝しきれず、家族には文句ばかりで、弟には厳しく指摘する毎日。担当医の先生がいまだに勧める年に一度の定期検診も、またどうせ正常値の範囲に収まるだろうという希望的観測で臨んでいる。あのころの私はどこへ行ったのか…。辛い思い出に包まれた病院でめぐちゃんに再会した瞬間、私はあの原点にタイムスリップしていた。それも、時間軸だけではなく、空間軸も移動したような感覚。そう、幼い私を感じていた「壁」は、健常者との境界線だったのだ。確かにあの頃の私は、自らの手で線を引いた「輪」の外側にいた。「輪」の内側にいる元気な友達たちが眩しかった。しかし、健康な体を手に入れた今、私は無神経にその境界線をまたいで「輪」の中に入り込み、鈍感にあぐらをかいて日常を送っているのではないだろうか。自分を中心に考えてはいないか。めぐちゃんに笑顔を返せなかったあの瞬間

間の私を切り取って、自分を責め、その対応を悔いた。自分で引いた線がいつしか「障害」物になってはいまいか。いつの日かこの世の中にあるすべての境界線が限りなく広がり、その内側と外側を区別する「輪」という概念自体がなくなればいいと思う。その実現のために、私は障がい者など社会的な弱者こそ輪の中心において考えたいと思う。障がいもまた人それぞれがもつ個性であり、多様性として認め合うことが大切だ。皆かけがえのない命を燃やして生きている。今置かれた状況に感謝をし、困っている人が目の前に現れた時に躊躇なく手をさしのべる勇気を持ちたい。それがひいては

“No one left behind”

すべての人が認め合って、一人残らず幸せを感じられる世界を作り上げられるのだと信じている。

今回の検査も無事正常値に収まった。もう帰っていいのに、私は夕陽に赤く染まる廊下の椅子に、まだ座っていた。ふと、向こうからめぐちゃんらしき人影が現れた。その瞬間、私は立ち上がった。そして笑顔で駆け出した。

知る。そしてつながる

須藤 希望
すどうのぞみ
鈴鹿高等学校二年

私の母は、障がい福祉事業所の職員として働いています。そういう背景があり、私も小学生の頃から、母の職場の就労継続支援事業所に何度かお手伝いに行かせていただいたことがあります。

そこでは、併設されている農産物直売所や地元の道の駅などでの対面販売用の野菜や果物の袋詰めを行っていました。私も利用者さんの中に混じって、一緒に作業をさせていただきました。

とても恥ずかしいことだったのですが、それまでは障がいを持った方は「手伝ってもらわなければ何かをするのは難しい人」というイメージを持っていました。

しかし、利用者さんは慣れた手つきで黙々と作業をされてきました。途中で次の作業に取り掛かる際に、勝手に自分の方法でやってしまった方がいて、職員さんに「終わったら報告してください。」と注意されていました。その方は「最初にそんなこと言われてなかった。」と言いながら、少

し怒ったような態度で荒っぽく作業をしていましたが、次の作業が終わると「できました。」とちゃんと報告をしていました。

また、別の利用者さんは、手と足にハンデキャップがあり両杖をつかっている方でしたが、袋詰めした商品をその方専用の肩から掛ける袋に入れて、売り場に運んでいました。その時私は、あんなに重い荷物を運ぶ作業をなぜ体の不自由な方にさせるのか、手で持てそうな方が手伝ってあげないのか、と思い「手伝いましょうか？」と声を掛けました。するとその利用者さんは「そんなことを言うてくれて嬉しいなあ。でもこれは僕の仕事だしこの袋があるから大丈夫。」と言って自分で運んでいきました。

自分では「良い事」をしようとしたつもりだったので、なんだか受け入れてもらえなかったような残念さがあり、後ほどこのやり取りを母に話しました。すると母からはこんな話がありました。

「お手伝いしようとした気持ちと声を掛けたことは確かに良い事だったと思うけど、その時、その利用者さんは困っていらさうだったかな？」と。

就労継続支援事業所という場所は、様々なハンデキャップを持った方が、少しでもできる事の幅を広げて仕事にならげていくための訓練の場所だそうです。そのため、困りごとや障壁を取り除くことを『合理的配慮』と言い、その合理的配慮を行って作業や訓練をし易くするためのお手伝いを『支援』と言うそうです。

先の話の利用者さんも、前もって「報告してください」と伝えてあったら、報告をしていました。そして、私が手伝おうと声をかけた利用者さんは、その方が持つて運びやすくする為の袋を使っていた事、それを留意したということなどが『合理的配慮』となる事を学びました。また、それぞれに困っている事やわからない事がある方が、自分から声を上げる練習をしたらう事も、自立につながっていく支援だという事も学びました。

合理的配慮とその意味を学んで、私は最初に思っていた様な「手伝ってもらわなければ何かをするのは難しい」という考えが「配慮や手助けがあればたくさん事が出来る」という事に変わっていききました。

ある利用者さんはとても気さくで優しい方で、緊張している私にたくさん話かけてくれました。日常生活を送って

いる中で、確かに不便で不自由な事が多い事、そんな中でも、私のように声をかけてもらう事は本当に嬉しく、どうしても難しいことはやはり手助けをしてもらう事によってやり易くなると話していました。

しかし反対に、困っていても明らかに避けられたり、見えて見ぬふりをされる事は、それぞれの人の考え方があるのはわかっていながらも、無関心はやはり寂しくて残念な気持ちになるとも話していました。

私は、声をかけたことはお節介を焼いてしまったのかも少し自信を無くしかけていましたが、その方がたくさん話を聞かせてくれたお陰で、もしも、どこかで困っている方を見かけたら、ハンデキャップがある方にも無さそうな方にも「お手伝いしましょうか？」の一声をいつでもかけられる心構えを持つて準備をしていようと思えました。

新型コロナウイルス禍のせいで、いろいろな場面での距離をとる事が求められており、人と人との触れ合う機会もうんと少なくなりました。マスクや画面を通しての交流は一見味気なくも感じますが、それも今の時代に生きている自分たちの強みとして、情報を得る事、知識を持つ事、関心を持つ事など、離れていてもできる方法で、心がつながる場面を探していこうと思えました。

仲間のために、未来のために 私のスーパーヒーロー

長谷川てまり
はせがわ
長谷川てまり

「部屋に飾っておくね。」私たちが作った似顔絵入りの誕生日プレゼントをすごく喜んでくださった。しあわせな時間だった。

ずっと直接会えなかった。新型コロナウイルス対策で、会うのはいつもパソコンの画面越し。だからずっと、少し悲しかった。

七月上旬、感染状況が改善。「よし、行くぞ!。」やっと直接対面がなかった。笑顔がとてもチャーミングなおじいちゃん。私の大好きな人。その人は、岡山県にある国立(ハセン病)療養所長島愛生園の自治会長を務めておられる中尾伸治さん(87)。冒頭は、その時のシーン。彼は、「飾らずにありのままに生きる」こと、「ひとはどんなときでもやさしさを大切に生きる」ことを教えてくれる、私にとつての「正義のヒーロー」なのだ。

中尾さんに初めてお会いしたのは今から半年以上前のこと。「らい予防法」(1996年廃止)に基づく終生絶対隔離政策

17歳の時、ふるさとの奈良に帰省し、兄に「名前を変えた方がいいかな」と聞きました。すると兄は、「兄弟2人しかないのに、そんなさびしいことを言うなよ」って言うてくれたんです。うれしかったですね。療養所では、偽名の人がたくさんいましたから。

でも数年後、再び帰省した時に、その兄がこんなことを言うんですよ。「悪いけど今後は、家に帰って来んといてくれ。」って。そのときはもう、兄は結婚して子どもができていました。兄にも守らなければならぬ家族ができたとき、差別を恐れたんですね。僕は兄の言葉をすぐに受け入れました。

「誰も悪くないのに…」と思った。それがいちばん悲しかった。だから泣けた。同時に、怒りが全身を襲った。それは中尾さんのお兄さんやそのご家族に対するものではない。彼らが恐れる「差別する社会」に対する怒りだ。大切な家族を守るために、大切な家族を失わなければならない状況に追いやった社会に対して、どうしても怒りが収まらなかった。

だが、もし私だったら、と考え込んだ。いや、そうやって、自分事として考えなければ、中尾さんとご家族に申し訳ないと思った。だって、私もその「社会」の一員なのだ。だから、一度と同じ惨劇を繰り返さないために、差別の事実を

によって、故郷を追われ、家族を奪われた中尾さんたち、ハセン病回復者。二度と同じ過ちが繰り返されないように、彼らの生きざまを記録し、後世に残していく取り組みを部活の仲間と企画し、オンラインで聞き取りを開始した。

中尾さんらは、療養所に收容されてからも、過酷な労働を強いられ、子どもをつくることも許されなかった。家族に差別が及ぶことを恐れ、家族と縁を切るという意味で偽名が強要されることもあった。そんな生活の中の生きざまを、中尾さんから3回、時間にして約6時間も対話しながら、記録した。

「こんにちは! 今日もよろしくね!」と、明るいつもの中尾さん。そんな元氣いっぱいな姿とは裏腹に、ゆつくりと、そして少し悲しそうな表情で自身の過去を語り始めた。

知った私が、差別をなくすための行動をしなければならな
いと思った。

でも私は正直、自信がなかった。回復者やご家族の心に深く刻み込まれた重い苦しみは到底、私には理解できない。それにハンセン病がどんな病気なのかさえ、つい最近まで知らなかった。そんな自分が後世に回復者やご家族の思いを継承できるのだろうか…。

そんなふうには、自分を見つめて迷っているときにふと、中尾さんを思い出した。彼はいま、長島愛生園の世界遺産登録に向けて精力的に活動している。そのようすを私に語ってくれたときの彼の生き生きとした表情を思い出したのだ。

長島愛生園にあった患者専用の収容棧橋。ここは入所者が家族や社会との繋がりを引き裂かれる場所。同時に、彼らが「汚い者」として扱われる生活が始まる場所だ。だが、棧橋は今、潮の流れに耐え切れずに朽ちている。中尾さんはこの現状に対してこう私に言った。

「(棧橋を)残さないと、過酷な隔離政策の歴史も失われ、忘れられることになってしまふんよね。忘れると、人間は、同じ過ちを繰り返すんよ。だから、自治会長としても何とか、残さなきゃいけないと頑張っています。」

中尾さんは、未来に生きる人々の幸せのために棧橋を復旧しようと懸命に活動している。「未来に生きる人々」と

は、私のことだ。

それだけではない。中尾さんは県内外の小、中、高等学校で語り部活動もされている。療養所に暮らす回復者の平均年齢は中尾さんの年齢と同じ約87才。自治会活動も語り部活動もできる人が年々、少なくなっていく中で、中尾さんは、仲間のために自治会長を引き受け、仲間の思いも自ら背負い、語り部活動を務めているのだ。

中尾さんは、病気の後遺症で、顔や手の変形している箇所がある。その彼が語り部活動でこだわっていることを教えてくれた。

「子どもたちを前にしたとき、顔や手が見えるように工夫しています。病気そのものを知ってもらうことで、差別や偏見が少しでもなくなっていくと僕は信じているんですよ。」

どうすれば若い世代にも理解が広がるか。中尾さんは、差別する社会を、人にやさしい社会に変えるために、自分を飾らず、ありのままの自分で、自分を語り、行動している。

未来に向かって真っ直ぐな眼差しで進む中尾さんの姿は誰よりも輝き、誰よりもかっこいい。そんな中尾さんを見て、自分に自信がなく、何に対しても全力で打ち込むことをためらう自分がちっぽけに見えた。そして、私も中尾さんのように強くなろうと決心した。

私は将来、保育士になりたい。子どもたちが人を大切に
して、平和な世界をつくる人に育ってほしい。そのためにも、私は子どもたちに伝えたい。仲間のために、未来のために、恐れることなく、自ら立ち上がり、私に勇気を与えてくれた私にとつての正義のヒーロー中尾伸治さんが生きた証を。「ねえ、ねえ、私の大好きなヒーローを教えてあげようか。あのね……」って。